

赤鬼の授業」 泣いたら赤鬼、陽はまた昇り スピンオフ

先生
赤鬼

1、 教室 出席

ガラリと、ドアが開く。
先生らしき女がひとり、入ってくる。
両手には教材を持って。
しかし、ぎこちない。

先生 出席とりまーす。

あたふたしている。
慣れていない。

先生 席に座っている観客の名前を読み上げる
もし返事がなかったら、

先生 大きい声でお返事お願いします。

それでも返事をしてくれなかったら、

先生 大きい声でお返事を、

先生 小さい声でもいいです。

とにかく、ぎこちない新米教師風の、女。

先生 今日の授業は、「泣いた赤おに」です。

紙芝居を見せる。
ぎこちなく紙芝居を始める先生。

先生 ないた あかおに はじまりはじまり」

先生 わ……私……

赤鬼 先生のくせに。

先生 くせにって言わないでください。今はお休み中で、

赤鬼 え？

先生 ま、まだ、リハビリ中なんだから……

赤鬼 イイワケしてるー！

先生 してません！

赤鬼 さっき俺にチョーク投げようとしたでしょ？

先生 それは、び、びっくりして、

赤鬼 大人がそれすると子ども真似しちゃいますよ。

先生 分かっています！

赤鬼 それに声が小さい！

先生 だって緊張するんだもん。

赤鬼 あんまり小さいんじゃないや誰も聞いてくれませんよ。

先生 ひ、人見知りなんです。

赤鬼 そんなんじゃない先生続けられないですよ？

先生 だ、だからこうやって練習してるんです。

赤鬼 というわけで皆様、どうぞ練習におつき合ってくださいませ。

2、 紙芝居

先生 ないた あかおに」

先生と赤鬼の、泣いた赤おに」の紙芝居が始まる。

紙芝居の「」内のセリフは赤鬼が、

文章は先生が読む。

紙芝居をちゃんと演じます。

新米先生は紙芝居の後ろの文字を見ながら読んでかまいません。

赤鬼さんは「」内のセリフは覚えませす。

3 D紙芝居というわけです。

3、先生と赤鬼

紙芝居が終わると、
グズ……っと、先生が鼻をすする。

赤鬼が、そんな先生を見る。

赤鬼　なんで泣いているんですか。

先生、赤鬼を見る。

赤鬼　泣くのは俺のほうで、先生じゃないですよ。

先生　だって……

先生は紙芝居を片付けて、
チョークを手に、

先生　では。

先生、気をとりなおして。

先生　どうして泣いてしまうのか、考えていきましようね。

ぎこちないけれど一生懸命に。

先生　授業を、はじめます。

先生は教科書（たぶん虎の巻）を片手に、黒板に書き記す。

ほんとうの　ともだち」

先生　泣いた赤おに」のお話で、考えたいことが3つあります。

先生は、話しながら「」を黒板に書いていく。

先生 どうして赤鬼さんは人間と友だちになりたかったのでしょうか。ひとつめは 赤鬼のきもち」

先生 青鬼さんは、どうしてこの計画を考えたのでしょうか。どうして赤鬼さんの前から消えたのでしょうか。ふたつめは 青鬼のきもち」

先生 村の人たちは、どうして初めは赤鬼さんと友だちにならなかったのでしょうか。なのはどうしてこの計画のあとは赤鬼さんと友だちになれたのでしょうか。みつつめは 村人のきもち」

先生 これらを考えていくと、この、

先生は一番はじめに書いた文字を指した。

先生 ほんとうの ともだち」ってなんなのかが、見えてくると、

赤鬼 思いません。

先生 え。

赤鬼 それじゃなんも見えてこないよ、先生。それはテストに出る話だね？

先生 ちよっ、

赤鬼 学校の、通信簿を作るときのための目安のテスト。

先生 赤鬼さん、そ、そういう言い方しなでください。

赤鬼 だって先生、それ。

先生から教科書を奪い取る。

先生 やっ！ やめっ……！

赤鬼 先生が授業をするための教科書に書いてあること、そのまんまだよ。

先生 だから練習だって言ってるじゃない！

赤鬼 教科書通りにするなら練習いらさないんじゃないですか。

先生 なんでも準備しているの、ぶっつけ本番なんて無理なんだから。

赤鬼 でも先生が本当に伝えたいことは変わらずにあるんじゃないの？
先生 は、は？
赤鬼 教材なんか頼らなくっても。
先生 せ、先生にだって、教えるための教科書があるんです。
赤鬼 えー、そのまんま虎の巻使ってるのが授業って言えますか。
先生 そんな……
赤鬼 はい？
先生 鬼のくせにそんな理想言わないでよ……
赤鬼 あ、差別。先生のくせに。
先生 くせにって言わないでよ。
赤鬼 そっちが先に言ったんだろう。大人のくせに。先生のくせに。女のくせに。人間のくせに。
先生 赤鬼さんにそっくりの生徒がたくさんいたわ。
赤鬼 え。
先生 こっちが未熟だからって虐めてくる生徒。生徒のくせに。
赤鬼 だから学校の先生辞めたの？
先生 辞めてない、休んでるだけ。少し、実家に戻って、療養して、
赤鬼 また先生したいの？
先生 ……したいの、って、そんな聞き方されたら、
赤鬼 元気になったらまた東京に行くの？
先生 だって、ここにいても、仕事もなんもないし。
赤鬼 でも、もともとここが嫌だったから出て行ったんだろ？
先生 赤鬼さんって……
赤鬼 なに？
先生 なんでそんなに私のこと知ってるの？
赤鬼 覚えてない？
先生 え？
赤鬼 ファイト一発新聞で俺のこと書いてくれたでしょ。
先生 え。
赤鬼 発見しました」

赤鬼が新聞を取り出す。

手書きの、学級新聞らしきもの。

赤鬼 赤鬼がなんで泣いたのか、りゆうを、考えれば、たくさん、あるのですが、どれもなんだかびったり、しません。赤鬼が泣いたのは、赤鬼は、じぶんでも、わからないのだと、おもいます。だから、なんども、青鬼の手紙を、読んだのだと、おもいます。中野小学校4年」

先生 ……発見カード……それ、

赤鬼 俺のこと発見してくれたんだよね？

先生 私が、書いた、

赤鬼 いったも俺の話を読んでくれていたよね？

先生、たぶん、図書館のほうだろう方向へと視線を向ける。

赤鬼 3階の図書室で、返さなくちゃいけないのに、いつも、どこに行くのも持っていてくれて。覚えてない？

先生 本当に、泣いた……赤鬼？

赤鬼 就職が決まった日も、お別れを言いに来てくれたの、忘れた？

先生 好きだった、図書室の、絵本……

赤鬼 し。

赤鬼が唇に人差指を当てた。

ゆっくり、黒板に耳を当てる。

赤鬼 モノはなんでも聞いているから。

先生 え？

赤鬼、先生にも耳を当てろという仕草をする。

先生、ゆっくり黒板に耳を当てる。

赤鬼 聞こえる？

微かに。

小学校の、騒がしい音がする。

子どもの声。

廊下を走る音。

赤鬼 黒板、教科書、ノート、鉛筆、椅子、机、窓、廊下、階段、ドア、チョーク、日差し、木漏れ日、モノ、ここにはたくさんのモノばかり。上履きだつて聞いているよ。黙ってるけど、ちゃんと聞こえてるから。こぼした言葉は全部吸いとってる。なにを言ったのかも全部、ちゃんと聞いている、モノ。
先生 モノが……？

今度ははっきり聞こえる、小学校の風景。

赤鬼 聞こえる？

先生 ……聞こえる。

赤鬼 覚えてる？

先生 覚えてる……

赤鬼 学習発表会のことは？ あの劇の発表はね、俺たちいろんなモノも楽しみにしてたの、知ってる？

先生 あの時、私、村人7だった。

赤鬼 知ってるよ。

先生 知ってるの？

赤鬼 君のそばにいたからね。

赤鬼、先生を見た。

赤鬼 毎年、いろんな子がこの廊下を走り抜けて、全部で80人くらいだけど、全員の言葉を聞いてたよ。君が俺の絵本のページをめくりながら、隣の男子がはしゃいでいるのも聞いてた。
先生 隣って、

赤鬼 スカートめくりばかりするあいつ、
先生 ああ……松本くん!?

赤鬼 そうそう、この間、あいつここに来たよ。生まれたばかりの子ども、
連れて来てた。

先生 もう、ここには通えないんだもんね。

赤鬼 俺らだけが残されてる。

先生 だから松本くん、

赤鬼 うん。だから連れて来てくれたんだって。

先生は黒板から耳を離し、ドアに、窓に、教卓に、床に、
いろんな場所に耳をくつつける。

先生 その頃の私は泣いてた？ 笑ってた？ 文句ばかり言ってた？ でも
やっぱり笑ってたよね？

赤鬼 聞こえてるよ。聞いている。話していいよ。

教室の後ろの壁に耳をつけた先生に、
赤鬼が話しかける。

赤鬼 ここを出て行って、ひとり暮らしは楽しかった？

先生 ……それなりにね。

赤鬼 仕事は楽しかった？

先生 それなりにね。

赤鬼 でも今はリハビリなんだよね？

先生 可能性を探したいの。

先生 って、言って、

赤鬼 うん。

先生 出て行ったのよね。

赤鬼 うん。それが青春だよな？

先生 新しい場所に行けば、きっと何かがあるって、

赤鬼 まあ思うよね、青少年は。

先生 だって何も無いんだもん。

赤鬼 思うのは自由だから。そういう子、たくさん知ってる。

先生 あの子は坂の上のお家、この子のお父さんは何をやっていて、家族は誰
でどうで、私のお家はどうで……って、だって学年、12人しかいないんだよ？

全部で80人なんて、知らない人がいなくて、みんな知ってるから、安心だけ
ど、でもなんかね、どう冒険したらいいか分からなくて結局何も出来なくて、

赤鬼 何に焦ってるのか分からないのに焦るってやっだ。

先生 だから外に出て行って、誰も知らないところへ、東京のマンションに引
越した時に、隣にどんな人が住んでるのか分からないのがドキドキして楽し
かったもん。

赤鬼 うん。

先生 不安なカンジが、これが可能性！？ って、未来が分からないこのカン
ジが、

赤鬼 うん。

先生 だって誰も私のこと知らないんだよ。何やっただっていいんだよ、何を言
ったって、誰も、誰も、どうせ私のことなんて、知らないから……

赤鬼 うん……

先生 夜眠れなくなったら歩いて5分の駅前のカフェに行くの。夜中の2時に。
街は騒がしくて明るくて、

赤鬼 大人の不良だね。

先生 それが楽しくて。

赤鬼 うん。

先生 でも虚しくて。

赤鬼 うん……

赤鬼 で？ 何か見つけられた？

先生 ……駅まで歩いて5分。電車で15分乗ればすぐに渋谷で、知ってる？
テレビによく出てる、ほら、ニュースとか、あの大画面。交差点。なにかも
あるの。なんでも揃ってる。どんなものもある。ある、ある、のに、なんに

もないの。

赤鬼 あるの？ ないの？ どっち？

先生 私が思っていたものが、ないの。でもそれ以外のものは、なんでもある。

赤鬼 どんな可能性を探していたわけ？

先生 分かんない。うるさいから、

赤鬼 え？

先生 人の声が、生徒の音が、学校のチャイムが、車の音が、電車が、町の音が、うるさいから、うまく、考えられない、雨の音も風の音も木がワッサワッサ鳴る音をうるさいなんて思ったことなかったのに、町はうるさいうるさいから、きっとこんな風になっているの私くらいだよ、同じ学校の先生も岩手かどっかからやってきて、でも全然平気そうだったし、私だけが、

先生、呼吸が荒い。

赤鬼、唐突に、

赤鬼 この前、大阪の人がさ、

先生、赤鬼を見た。

先生 え。

赤鬼 ここに来たら癒されるって。

先生 あ、ああ。

赤鬼 3ヶ月は住めるって。でも、一生ここにいろって言われたら困るって。

先生 は？

赤鬼 癒されたから余計に、大阪のむっとした空気と臭いとガチャガチャした町に戻ったら吐きそうになったんだって。で、おえええってエヅキながら、ああ、やっぱここが落ち着くわあって。

先生 は！？

赤鬼 イヤなんだけど好きなんだって。自分には吐きそうな町が性に合ってるって。

先生 は……

先生、ははは、
と、少しだけ笑った。

先生 窓を開けるとね、
赤鬼 うん。

先生 遠くに、ものすごく遠くに、東京タワーが見えるの。

赤鬼 うん。

先生 そういう風景。絵葉書みたいなの。何も感じない。好きも嫌いもない。でもね、

赤鬼 うん。

先生 ここが嫌いよ。

赤鬼 うん。

先生 でもここが好きなの。

赤鬼 うん。

先生 どっちも本当なの。

赤鬼 人間って変わってるよね。ただ好きってだけじゃ、愛おしさは生まれな
いんだ。難しいし変わってる。

先生 逃げられる場所がどこにもなくて、ここしかなくて。逃げ出したのに逃
げ帰って、可能性なんてよく言う、なにそれ、ただの言葉なのに、きつとね、
どこに行っただってダメなんだ、私、

先生、うつむいた。

赤鬼 なんで泣いているんですか。

先生、赤鬼を見る。

赤鬼 泣くのは俺のほうで、先生じゃないですよ。

先生 赤鬼さんは、

赤鬼 はい。

先生 自分がどうして泣いたのか、分かってる？

赤鬼 読んだ人の数だけ、理由が見つかると思うから。

先生 自分のことですよ！

赤鬼 先生。自分のことだよな？ どう思っているか、分からないの？

先生、ゆっくりと顔を上げる。

先生 赤鬼は、新しい人生踏み出したけど、虚しさにも踏み出したんだよ。

赤鬼は、

先生 だから泣いたんだよ。

先生のそばまでゆっくり歩く。

先生 これから先、ひとりぼっちでどうなるのか不安で見えなくて、青鬼のことを考えていたはずなのに、自分のことばかり考えてそんな自分も嫌で、でも不安で、いろんなことがぐちゃぐちゃになって、

赤鬼 教科書とは関係ない、それが、今の気持ち？

先生 泣いたことに理由がつけられるくらいには、大人になったってこと。

赤鬼 それはいいこと？ 悪いこと？

先生 どっちでもない。けど、

赤鬼 けど？

先生 自分が、どうなりたいのか、分かんないってことだけが、分かる。

赤鬼 だからここに帰って来たんだよな？

先生、赤鬼を見た。

赤鬼 知ってるよ。

先生 え？

赤鬼 ピカピカの1年生の時に、初めて俺のこと読んでくれた時。

先生 ……そう、だった、かな……？

赤鬼 わんわん泣いた。

先生 そう……

赤鬼 こんなに泣いたのはじめてだって言いながら、わんわん泣いた。

先生 だった、かな……

赤鬼 だからここに来たんだよね？

先生 え……？

赤鬼 もう1回、ピカピカに、なりに来たんだよね。

先生 ぴかぴか……

赤鬼 疲れたら休む。休んだら、またピカピカに戻るから。

先生 どこに、行きたいのかも、分からないんだよ？

赤鬼 本当に疲れたら最後にここに戻ってくればいい。なくならないよ。ずっとここに居るから。いつでも。モノだからね。俺らは。いつまでも、待ってられる。

先生 青鬼みたいに、旅に出ろっていうの？

赤鬼 旅はいつか終わるから。どこにもたどり着けなかったら戻って来たらいいよ。

先生 そんな都合のいいことってある？

赤鬼 そのため、赤鬼は一步踏み出したと思うんだけど。

先生 え？

赤鬼 10年後、20年後、30年後、青鬼がふらりと戻って来る頃には、そこは鬼も人間も妖怪も妖精も、自分と違うって生き物ものたちが、同じところから、同じように暮らしている。だからふらりと戻って来られる。自分とは違うからって、誰からも石を投げつけられたりしない。そんな理想のために、赤鬼は一步踏み出した。友情から始まったけれどいつしかそれは使命と志の話になっていくんだ。

先生 そんな……話だったの？

赤鬼 例えばね。

赤鬼 そんな風にも読める。

赤鬼 君は、どんな物語だと思う？

赤鬼 今の君が考えるなら、どんな物語に読める？

赤鬼 それは、教科書の虎の巻には書いてない。

赤鬼 ネットで検索したって、誰かの考えだから。

赤鬼 今の君は、なにを思う？

赤鬼、そっと、先生の背中を押した。

赤鬼 踏み出して。

先生、振り返ろうとして、

赤鬼 振り返らずに、踏み出したら、なにが見える？

先生、一歩踏み出す。

机の間を、歩く。

黒板に向かって。

歩く。

教卓まで歩くと、黒板消しを持つ。

さっき自分が書いたものを、

消す。

全て、消す。

そして、チョークを持つ。

今の君は、なにを思う？

踏み出して、

振り返らずに、

踏み出したら、

なにが見える？」

黒板に、書き記す。

先生、やっと振り返って椅子に座る全ての人を見る。

先生 起立。

すべての人が立ち上がるまで、起立を繰り返す。
立ち上がったら、

先生 自分だけの授業を、始めてください。

先生 礼。

先生 ありがとうございます。

そしてこの授業は終わりを迎える。

おしまい